

紫式部集における恋歌と哀傷歌

管野美恵子

はじめに

『紫式部集』においては、娘時代の詠歌にみられるような、みずみずしい情感に溢れた、勝気で積極的な若い式部像と、屈折し低迷する思考を折り重ねていく、内向的な後年の式部像とがきわめて対照的に描かれている。この二つの式部像のはざまに位置するのが、藤原宣孝との結婚・死別を経て出仕に至る時期の詠歌である。小稿はこの歌群における二つの疑問について検討してみたいと思う。

一つは、その排列である。式部と宣孝の結婚生活は長徳四年冬から長保三年四月廿五日まで、およそ二年半の間のもものと推定される。^①ところがその間の詠歌とみられるもの的一部は、この家集の原則をなすと言われる年代的な順序とまったくかかわりなく、家集後半部に散在している。こうした排列の乱れは後因的なものなのだろう

うか。それとも、集編纂時における式部の何らかの意図によるものなのであろうか。

また一つは、家集における哀傷歌の寡少さである。宣孝の死が式部にもたらした意味の大きさはさまざま推察されるにもかかわらず、その哀傷歌は極く少なく、それも一首を除いてすべて贈答歌であるということの不思議さ。式部は事実哀傷の歌を詠むことが乏しかったのであろうか。それとも家集に乏しいのは、これも式部の意図によるものなのであろうか。

以下、結婚生活と寡居生活での詠歌を瞥見することにより、家集編纂の意図の一端を探ってみたい。^②

一

桜を瓶に挿して見るに、取りもあへず散りければ、桃の花

を見やりて

36 おりて見ば近まさりせよ桃の花思ひぐまなき桜をしまじ

返し、人、

37 もといふ名もあるものを時のまに散る桜にも思ひおとさじ^④

この贈答はおそらく、結婚からさほど時を経ぬ長保元年の春のものであろう。「見やりて」は、清水好子氏の言われるように「屋外の桃の花^⑤」と思う。従来は多く、桃を式部、桜を別れた宣孝の妻とみて、「こうしてあなたの妻となつたのですから、予想していたよりも、もっと良い女だつたと思つて頂きたいわ、あなたの気持も考えないで身勝手な方のことなんか、惜しがることなんかいりませぬわ^⑥」というように解している。しかし、この場合、「折りて見ば」という仮定条件を、「妻となつたのですから」という確定条件の比喩とみることは多少無理ではないだろうか。また、清水氏は、「自分を桃、今一人の妻を桜に喩えるのは一見卑下が過ぎるようにも思つて『思ひぐまなき』とけなしているので、十分に相殺したことになるか。」と説かれるのだが、はたしてそうであるか。

『源氏物語』、竹河巻に次のような歌がある。

桜ゆえ風に心のさわぐかな思ひぐまなき花と見る見る^⑦

玉鬘の姫君たちの桜争いの折の大君の歌である。桜を「思ひぐまなき」と評する形容の類似性からみて、今井源衛氏の言われるごとく

紫式部集における恋歌と哀傷歌

この歌は、36の式部自身の歌を素材にしたものと思われる^⑧。大君は一応、桜を「思ひぐまなき花」とけなしてみる。こんな思いやりのない花なんて、もう気にするのはよそう、と考えてみる。そうはみるものの、その思いの下でもう風にも心は騒ぐのだ、と、桜にひかれる心を歌うのである。「思ひぐまなき」という評は、自分の愛する心も思いやってくれない、という桜への恨みで、結局は作者の哀惜の表現となっている。同じことは36の場合にも言えるのではないだろうか。「……ならば桜も惜しむまい」という仮定表現自体、桜が惜しくてたまらぬ思いの現れであるし、「近まさりせよ桃の花」の語にも、当然桜は惜しまれるもの、桃は顧られないものとする美意識がうかがわれる。

こうした意識は無論式部だけのものではない。古今和歌集において春の部立に採られなかった桃の花は、長きにわたって、

咲きし時猶こそみしか桃のはな散れば惜ぞ思成ぬる（拾遺集

雑春・読人しらず）

のようにしか扱われなかった。式部もまた、こうした王朝の伝統的美意識から決して踏み出してはいない。『源氏物語』中、桃の花は、わずかに人名としてみえるのみで、ついにその姿を現さないのである。そのような美意識を持つ式部は、結婚したばかりの夫の前で、自分を桃をたとえるようなことはしなかったであろう。それは

「相殺されるような卑下ではありえない。また、そうした比喩の歌ととれば、宣孝も「もも」という名もあるものを」などと返歌はできない。そんなことをすれば式部は桜の前の桃、とるに足らぬ女だと認めることになるではないか。従ってこれは寓意のない贈答とみたい。「折りて見ば」と言い、視線はそこに向かいながら、「見ば」という仮定はまさしく「見ば」であって式部は本当に桃を手折る気はなかったのではないだろうか。散ってしまった桜が残念でならない式部の、偶然視野に入った桃の花に、ふと口ずさんだ、軽い即興の歌だと思つのである。唱和して宣孝は、「もも」という名もあるものを」と歌う。式部のむきな桜への哀惜をおかしがって、なだめるように桃の花を持ち上げて詠んだものであろう。桃_二百と掛けた、とっさの機知の歌である。春の軽い戯れの贈答歌として二人の息はぴったりと合っている。歌の弾みは、そのまま心の弾みであらう。後年、『源氏物語』において、仲の良い姉妹の、はなやかな春の遊びのやりとりに、この贈答を素材に用いたということは、宣孝とこの場面が、どんなに楽しく懐しい思い出として式部の胸中にたたみ込まれていのかを想像させるものである。

家集はこの前後、32から35の生き生きとした夫婦げんか（「文散らしけり」）、38の「梨の花」の詠歌と、満ち足りた新妻の姿を偲ばせる歌が続いている。つまり、明るく幸せな新婚生活の日々であっ

た、と、印象づける構成がとられているのである。そしてこれらの幸せな結婚生活を想像せしめる歌群の後には、突然、宣孝亡き後の歌を展開させて、年代的には当然38番以後に続けらるべき「夜離れ」の続く頃の詠歌（79・80・93・96・109・114）を集の後半部に散在せしめている。この突然の展開によって、新婚時代の楽しさと宣孝没後の淋しさという明暗の対照は際立ち、一瞬に移ろいゆく人生のさまざま鮮やかに浮かび上がる。だがしかし、そうした効果からだけではこれらの歌群が後半部に分散されていることの説明はつかないように思う。

これら後半部に位置する結婚生活中の詠歌は、

79 久しくおとづれぬ人を、思ひ出でたるをり

93 なにのをりにか、人の返りごとに

96 六月ばかり、なでしこの花を見て

109 人のおこせたる

111 七日

などのように、その詞書は単純化され曖昧化されて、具体的な事情の説明は省かれている。このためこれらの歌は、一見、前後の出仕中の歌の中に並べられても、さして不自然さを感じさせないものとなっている。こうした細かい配慮は、この排列が、脱落やとじ直したといったものではなく、はっきりと式部自身の意図によるものである

ことをものがたる。そして、そのような排列をとったところには、式部の本能的とさえみえる自己陰蔽の性癖がみられると思うのである。

おのがじし家路といそぐも、何ばかりの里人ぞはと思ひおくら
る。わが身によせては侍らず、おほかたの世の有様、小少将の
君の、いとあてにをかしげにて、世をうしと思ひしみてゐ給へ
るを、見侍るなり。⁹³

紫式部日記の一節であるが、小少将の記述などいかにもとってつけた感じであり、「我が身によせては侍らず」とわざわざことわっているところに却って「我が身」を核として、「おほかたの世のありさま」に及んでいった思考がうかがわれる。式部はここでも自己の私生活、特に恋の苦悩の跡が辿れるような私生活の表白を慌てて避けようとしているのである。三谷邦明氏も言われるように、紫式部という人は、具体的事実に添って行なう自己告白に対して、「極めて強い恥辱心・羞恥心を感じる女性」⁹⁴だったように思われる。

二

なにのをりにか、人の返りごと

93 入る方はさやかなりける月影をうはの空にも待ちし宵かな
返し

紫式部集における恋歌と哀傷歌

94 さして行く山の端もみなかき曇り心も空に消えし月影
訪れては来ず、文だけを寄越した男へ贈った式部の歌とその男の返歌であり、月影は男を擬したものである。

もはや入り方の月を見ながら、女の心はまだ中空にさ迷っている。この夜、月影は明らかほど、女の心をいっそう寒々と依り所ない思いにさせたことであろう。秋の夜の実景は、この時式部の心と見事に溶け合っている。対して、返歌は、月を擬人化した贈歌の技巧をそのまま使いながら、「あなたのお怒りがこわくて」とざらりとうけ流し、式部の怨嗟には殆んど答えていない。女を我がものとしている男の自信が詠ませる歌である。

このような形で相手を恨み、自分の実意を主張するのは、恋歌の常套的な詠み方の一つではあるのだが、それにしても、結婚前には宣孝が他の女に言い寄ったと聞いて、「二心なし」などと弁解してくる男のことを、「うるさくて」と言い切り、

29 水うみに友よぶ千鳥ことならば八十の湊に声絶えなせそ

と傲然と返した式部が、今は「うはの空にも待ちし宵かな」と、待っていたことを素直に訴えるのである。更に、80「心のかぎり待ちぞわびにし」、96「垣ほ荒れさびしさまさる床夏」といった歌になると、そこには、ひたすら男に縋ろうとする哀訴の情さえほの見えているのだが、男の方は、「さして行く山の端もみなかき曇り」と、

平然と責めを相手に転嫁したり、109「うち偲び嘆き明かせば東雲のほがらかにだに夢を見ぬかな」などと白々しい弁解を寄越すばかりであった。専心に愛を誓ったはずの男の、あまりにも早い変貌である。こうした男女の立場の逆転は結婚を境としてこそのものであって、男は、式部の唯一の夫であったと思える藤原宣孝以外ではあり得ない。結婚前と後と、これが式部のみた、なべての夫婦の姿でもあった。結婚した女にとっては、自己の全人生を賭けて男の手中で生きるよりほかに、豊かな自らの生を求める術はない。にもかかわらず、その夫こそ、自分の願いと背反し、自分を屈服せしめる最も身近な幸せの障壁ともなり得る。ここに女の絶望的な抵抗がある。女は自分の本然の願望に執すれば執するほど、みずから深く傷つき、その絶望的な抵抗を繰り返さねばならない。

門の前よりわたるとて、「うちとけたらんを見む」とあるに、書きつけて、返しやる

113 なはざりのたよりに訪はむ人言にうちとけてしも見えじとぞ思

ふ

『蜻蛉日記』の作者も、気紛れにたまさかの訪れを告げる夫に、一夜門を閉ざしたままのことがあったが、式部もまた、求める心の強いほどにその愛の純一性を願い、男の真心の披瀝を強く望むのである。だが、自分を高く保とうとする心と、ともかくも夫をわが許

に通わせたいとする願いと、式部の中で痛ましい葛藤を起こさせている。式部は時に我が誇りも煩わしく、しかもそれを投げ捨てる屈辱にも耐え得ぬ自分に、いつそやる方のない苦しみを味わったことであろう。

久しくおとづれぬ人を、思ひ出でたるをり

79 忘るるは憂き世の常と思ふにも身をやる方のなきぞわびぬる
ただ単に忘れられた我が身のみじめさを怵ぶというのではない。忘れるということ、忘れられるということ、それが「憂き世の常」だと思つてはみるものの、虚しさつらさは如何ともするなく心奥から噴き上げてくる。理知をもってはとうてい抑え切れぬ情念の渦巻きを、なお見詰めねばならぬ、その恫びしさなのである。そして、こうした煩悶の中で式部は、夫にのみ向かおうとする思考を超えてもっと拡がりのある視線を持ち始めている。

又おなじすぢ、九月、月明かき夜

95 おほかたの秋のあはれを思ひやれ月に心はあくがれぬとも

一見、季の歌のようであるが、詞書に「おなじすぢ」とあるので、さきの93 94の贈答と同じく〈待つ恋〉の歌であることがわかる。月は宣孝の新しい愛人を指しているのであろう。

この歌には式部の歌の一つの転機が示されているように思われる。「思ひやれ」と男に呼びかけてはいるものの、その思いやらる

べき対象は、すでに「おほかたの秋」という抽象化されたものとなっている。式部の眼は、二人の關係をそのみにおいてとらえるのではなく、同じ苦しみにあえぐ数多の女の中に我が身を置いて眺めようとしているのである。こうした視線の深化こそは、式部の心に加えられた打撃の大きさと、しかもその打撃によって起こる激情に身をゆだねることを許さぬ式部の、強烈な自尊心のあり様を物語るものであると思われる。

身にちかく秋や来ぬらん見るままに青葉の山も移るひにけり

(源語・若菜)

女三の宮降嫁に打ちのめされながら紫の上は、しかし、女房たちの愚痴を抑えて宮を迎える準備にかいがいしく立ち働く。それは、これ迄源氏の正妻格として遇されていた者としての誇りを支えることのできる唯一の方法であったのだ。一角が崩れば果てのない混乱に陥りそうな紫の上の、源氏に詠みかけた歌がこれである。さりげなく自然の実景の中にその場の事情を移して、源氏への恨みを間接化する紫の上のこの詠歌には、決して取り乱すまいとする構えた姿勢が感じられる。こうした構えた姿勢こそが、紫の上の源氏に対する必死の抵抗であり、同時に、現実の式部の身の処し方でもあったのではないだろうか。ともあれ、95の歌における式部の思考は、もはや宣孝一個の生と己れ一個の生を出でて、人生の実相への痛覺

紫式部集における恋歌と哀傷歌

を伴っている。月光に照出される霜枯れの野のさまに、移ろいゆくおよそ愛たるもののわびしい実相を見て、我が孤独の胸中を嘯みしめているのである。紫式部の歌の特色の一つは、「人事の自然化・自然の人事化」にあると言われるけれど、そうした自然との一体化の傾向は、前述のように、極限に迫りつめられてゆく自己を、危うく引きとめて身をかわそうとする思考のあり方と無關係のものではないと思つのである。

袖ぬるゝこひちとかつは知りながらおりたつ田子のみづからぞ

憂き(源語・葵)

苦しみを背負うばかりと知りながら、とどまることのできないままに深まってしまった自分の恋を、六条御息所は足摺りをしたい思いで責めている。この御息所の心情はおそらく、式部自身の内実であつたろう。御息所の墮ちた地獄の凄まじさは、式部の情念の世界そのものと根底において連なっており、その再現でもあったとさえいえるのだ。だが現実の式部の自尊心は嫉妬に狂うことを自らに許さない。彼女は、それを「おほかたの秋のおはれ」として見据え直そうとする道をつけたのである。それをしなかつたならば、その時陥るに違いない狂乱の姿が、式部には見えていたのであろう。悲しみを一般化し、人生の実相としてとらえ諦視しようとするその姿勢は、とりも直さず、寂莫たる現状に耐えかねてなお、必死に自分

を立て直そうとする式部が辿り着いた唯一の自己救済の手段だったのではないだろうか。

三

宣孝の死は、当時猛威をふるった疫病による突然のものであったろうと諸家によって推考されている。^④

諦めようとして諦めきれなかった結婚生活の夢は「へ死」という絶対によって無惨に断絶する。式部の愛執は、その内面的葛藤のままに唐突に凝結させられてしまうのである。

今はただそよそのことと思ひいでて忘るばかりの憂きこともが
な
捨てはてむと思ふさへこそ悲しけれ君に馴れにし我が身と思へ

ば（後拾遺集・哀傷）

和泉式部のこの挽歌は、そのまま愛の歌でもある。こうした悲しみの絶叫はおそらく、愛の真相をつきることなく求め続け、自己の生命のぎりぎりのところにおいてその恋情に身を浸し切った者にして初めて放つことのできるものであろう。そしてそれは亡き後までもあまりに鮮やかに生き続ける恋人の面影への、まさに現在の恋情にはかならない。紫式部集にはこういったひたすらな哀傷は見当たらない。見当たらないだけでなく、そうした挽歌を詠む悲しみと

は、また質の異なる悲愁の中に式部は在ったとみられるのである。式部にとって、夫の死は愛する者を奪われた悲哀としてのみ存するのではない。ついに思いを受けとめられることのないままに終わった苦しさ、とうとう癒されることのなかった自尊心の傷つき、哀惜と恨みの交錯するその死は、和泉式部のごとき我をも失なうほどの悲哀感とは遠い、無力感・敗北感・挫折感として紫式部を襲ったことであろう。彼女にとっては慟哭さえもが、ややもすれば自分の惨めさにその思いを回帰させねばならぬものではなかったか。そうしてこうした意味での悲嘆に打ちのめされた姿を家集に遺すこともまた、式部の肯じないところであつたらう。宣孝の死後一年近くの間、家集には哀傷歌は記されていない。

去年より薄鈍なる人に、女院かくれさせたまへる又の春、
いたう霞みたる夕暮れに人のさしをかせたる

40 雲の上も物思ふ春は墨染に霞む空さへあはれるかな

返し

41 にかこのほだなき袖を濡らすらんかすみの衣なべて着る世に
「諒闇に比べて、夫の喪を謙遜し、自分の悲しみなどはとるにたらないと返事をするのだが、それは逆に視点を裏返せば諒闇以上自分の悲愁が激しい、深いものであることを詠んでいることになるのである。」と三谷氏は説かれている。^⑤「なにかこのほだなき袖を

濡らすらん」という表現は、相手に対しての儀礼的な発想であると同時に、悲しみにくれる自分を改めて見つめ直そうとする覚醒した自意識でもある。耐えきれぬ悲哀を、なお自己を失うことなく、耐えようとする時、人はこのような抑制のきいた表現をとるのではないだろうか。そしてそれは、結果として、何をどう考えてもこの袖は濡れつつづけているのだという悲しみの主張につながるのである。表面儀礼的な挨拶の調子を崩さないこの歌の内包する抑えがたくやりきれぬ悲哀、これが家集にとどめて示し得る式部の精いっはいの自己表出だっと思われる。ここは排列どおり、もつとも早い時期の哀傷歌と受け取ってよいだろう。というのは、後につづく他のそれらはすべて何かを媒介として故人を偲ぶという形式がとられており、そのことによって悲哀の表白は間接的なものとなり、歌の調子はいつそう静まって時の経過を思わせるからである。

世のはかなきことを嘆くころ、陸奥に名あるところへ書
いたる絵を見て、塩釜

48 見し人の煙となりし夕べより名ぞむつまじきしがまの浦
それがどのような煙であろうと、ついには煙に関係のあるものならその名を聞くだけでも夫と別れた夕の茶毗の煙が思い出されるというのだから、この頃の式部がどれほど宣孝の死と間近く向かい合
って暮らしていたかが察せられる。また

柴式部集における恋歌と哀傷歌

「ものや思ふ」と、人の問ひたまへる返事に、なが月つて
もり

97 花薄葉分けの露やなにかく枯れ行く野辺に消えとまるらむ
といった歌からは、遅れ残った命の、その命長さをむしろつらいと
嘆く式部の寂しさが惻々として迫ってくる。

「葉分けの露」は、葉を分けて下葉に宿っている露の意で、『古今
六帖』には

たまさきの葉分けにおける白露の今いくよへん我ならなくに
とある。つまり、当然すぐに消えるべき、露のように弱々しくはか
ないものが、思いがけず細々と長い命脈を保っていることのとえ
に用いられるようである。従って「枯れゆく野辺」は竹内美千代氏
も言われるように、^⑩夫の死後、人から忘れられたように訪れる人も
ない、寂しい寡居生活を表わすとみたい。「物や思ふ」はやはり

忍ぶれど色に出にけりわが恋は物や思ふと人のとふまで（拾遺
集恋一・平兼盛）

を踏まえていると考えるべきであろう。鬱々と日を送っている式部
の氣を引き立てようと、「何か悩んでいるようだけど、さては」と、
軽い揶揄をこめて言い贈ったものと解する。相手がふと投げかけた
軽口に式部の方は、いつそう我が身の寂しさが募って、支えるすべも
ないその心を、思わずも吐露して訴えたものであろう。

式部が家集に遺すことのできたのは、死別そのものの嘆きではなく、このように死別後の淋しさに耐える自分をみつめることでその悲愁を表すような、静かな自己省察の歌だったのである。

巻のすべてを死別の鈍色に染める「御法」「幻」を頂点として、

『源氏物語』には、百首余りの哀傷歌が並び、死を語る作者の筆は実に懇切を極めている。紫の上の死後、春の庭に桜が咲けば

わが宿は花もてはやす人もなし何にか春のたづね来つらん

と嘆き、夏がくればまた、

羽衣のうすきにかはる今日よりは空蟬の世ぞいと悲しき(源

語・幻)

とかきどく源氏の姿には、夫没後の式部自身の姿が重ねられていに相違ない。更に、出離の願いを洩らす源氏に、

猶しばし、おほしのどめさせ給ひて、宮たちなども、大人びさ

せ給ひ、まことに動きなかるべき御有様に、見たてまつりなさ

せ給はむまでは、みだれなく侍らむこそ、心やすくも、嬉しく

も侍るべけれ

と慰めさすと明石上のことばも、出家を思つてはまた、幼い賢子のことを考えて思いとどまる式部の、自身に言いかけたことばでもあったろう。桐壺更衣・夕顔・葵・藤壺・紫・柏木と、物語においてはくり返しくり返し死別の悲哀を綴った式部は、しかし、家集に

おいてその哀傷を殆んど語らない。語る時はあたう限りの抑制した表現にとどめている。ここには、恋歌と同様に、赤裸々な自己表白を避けようとする、式部の選択があると思うのである。

四

身を思はずなりと嘆くことの、やう／＼なために、ひたぶるのさまなるを思ひける

55 数ならぬ心に身をばまかせねど身にしがふは心なりけり

56 心だにいかなる身にかかなふらむ思ひ知れども思ひ知られず

家集の真中あたりに位置する二首で、この後には、初出仕の頃の歌群が続けられている。集の前半部はおおむね年代的排列をなしていることから考えて、この二首は、出仕を決意した頃の述懐と考えるとよいだろう。

言われるように、式部の宮仕えは、彼女の才を中宮彰子付女房として役立たせたいとする道長あるいは倫子の希望によるものであり、式部にとっては不本意なりゆきであったようだ^⑧。日記の中にも出仕を「おもなく心浅きわざ」と記している式部ではあるが、寂しい寡居生活の中で、その才を知つての道長や倫子の勧めには、その矜持に何ほどの快さを与えられもしたに相違ない。しかし、今一步我が身を突き離してみれば、その快さこそはまた、次第にみじ

めさに馴れゆく心のさまとして感受されたのである。

「数ならぬ」、最少限の願望にさえもこの身を添わせることはできなかつた。だが一方「心」の方はと言えば、それこそ身のさまにに応じて次第に変わっていくものであつたのだ、と式部は自嘲的に詠みあげる。更にまた、そんなささやかな「心」でさえ、どのような「身」であつたところで適えられはしない、それが「心」というものだ、と常理をもって己れを説明し、思い捨てようとする。が、すぐに「思ひ知られず」と内から突き上げてくる常理への反撥をどうすればよいのだろうか、と式部の心はまたも低迷をくり返すのである。我が「身」は思うに任せぬつたなきもの、と諦めてはいるものの、せめて「心」だけはと願いつつ生きて、ある時、その「心」にいつか、俗事に随い行かねばならぬ我が「身」の卑屈な影がしのび寄っていることに気づく、その驚き。そうした自身の「身」と「心」のさまを冷徹にみつめる時、式部の心はどれ程の寂寥にひたされたか。

うしとみて思ひ捨ててし身にしあれば我が心にもまかせやはする（和泉式部統集下）

身のうさをしるべきかぎりしりぬるを猶なげかるる事やなに事

（和泉式部集巻四）

さきの紫式部の二首と殆んど同題の歌である。両者はともに「身」

紫式部集における恋歌と哀傷歌

と「心」の分裂乖離を自覚しながらそれを諦めきれぬ苦しさを歌っているのだが、その詠法にはかなりの差異が感じられる。「猶なげかるる事やなに事」という和泉式部の卒直な懷疑は、まさに憂悶の極において思はずも洩れ出た詠嘆の吐露であり、表現することによって困惑と焦躁は、それなりに発散されている。それに對し、紫式部の「思ひ知れども思ひ知られず」という重苦しい確認の方法には凝視と思索を折り重ねて、なお決して外界に自己を溶解させることのない憂愁がわだかまっている。和泉式部の場合は、「身」と「心」の分離関係を、すでに固定した一つの常理としてとらえ、「まかせやはする」と言い切ってしまうところに却って一種不思議な明かるさが生まれている。自己を完全に突き離して一個の物体、人間というもの、としてながめる、〈潔さ〉とでも言いたい思い切りのよさから生まれる明るさである。一方紫式部の場合は、問題は「身」と「心」の対立それ自体ではない。常理として熟知していたはずの「身」と「心」の背反の様が、我が身においては脆くも揺れ動いている。しかも一方的な「心」の「身」への譲歩である。これは大変なことだ、と彼女は我が「心」の定めなき、頼みがたさに唇を噛みしめる。歌うことによつていつそう深い自己省察へ回帰してゆくのが紫式部の歌である。彼女にとって歌はカタルシスたり得なかつたのだと思わせるのである。

紫式部は日記の中で和泉式部についてその情熱的躍動的な抒情性を一応評価しながらも、結局は「口にいと歌のよまるるなめりとぞ見え侍るかし。はづかしげの歌よみやとはおぼえ侍らず」と評している。当時すでに一流の歌人として遇されていたらしい和泉式部を、「はずかしげの歌よみやとはおぼえ侍らず」と断言するには、彼女自身「ものおぼえ、歌のことはり」において精通しているという自負のほかには和歌の基盤たるそれぞれの生き方への意識が横たわっていると思う。紫式部は和泉式部の生き方、人生観がそのままあの生の悲しみと愛おしさに彩られる歌と重なり合っているのを知悉するがゆえに、「されど和泉はけしからぬ方にこそあれ」と、歌人と和泉式部を評するにその生き方もあわせて批判せねばならなかったのである。前述したように、癒しがたい悲傷を抽象化し一般化したポーズをもって詠むことにより、必死の自己回復をはかろうとする紫式部にとって、自らは抑え、籠めつつけている内面を、何を顧慮することもなく「口にいと」詠みあげる和泉式部の歌が、ある屈辱をもたらすものでなかったとは言いが切れない。言わばこの和泉式部評は否定しきれない圧迫を感じつつ、なお自己の生き方、人生観を主張せねばならなかった紫式部の、そうした意味での和泉式部への抵抗の姿勢を示している。

五

『源氏物語』夕霧の巻には左記のような紫の上のことが綴られている。

女ばかり、身をもてなすさま所せう、あはれなるべきものはなし、物のあはれをもをかきき事をも、見知らぬさまに引き入り沈みなどすれば、何につけてか世に経るはえはえしさも、常なき世のつれづれを慰むべきぞは。大方物の心を知らず、いふかひなきものにならひたらむもおほし立てけむ親もいと口惜しかるべきものにはあらずや

夕霧との噂的となつてゐる落葉の宮に同情して発した述懐である。しかし発した時それは、紫の上という、物語中の人物形象を超えて、作者である紫式部自身の、とめどもない恨みとなつて流出している。

「所せうあはれなるべきもの」として女の身をとらえる意識は、源氏の最愛の人、六条院の女主人として長く時めいて来た紫の上のことばとしてよりも、「一といふ文字をだに書きわたし侍らず」「御屏風の上に書きたることをだに讀まぬ顔をし侍りし」と、「ほけしれたる」演技を自らに強いて生きねばならなかった式部自身の心情としてこそふさわしい。また、「おほし立てけむ親もいと口惜しか

るべき」ということは、幼くして母と死別し、父宮からも殆んど顧られることなく育った紫の上の思惟の及ぶべきところではあるまい。父為時を「口惜しう、男子にてもためこそ」と嘆かせながら、その愛を一身に受けて成長したと察せられる式部であつての感懐であらう。

南波浩先生は、「為時のこの感慨の表明は、幼少の式部に対し」「優越感」と「劣等感」を同時に生起させたものであつた。」と指適される。そうした幼い日の思い出を、はるか後年の日記にしたためているということは、「最初の知己」であつた父に才能を認められた嬉しさとそこから生まれた「優越感」、その父を嘆かせる「女」として生を受けた無念さと「劣等感」、この相反する感情を式部が、幼少時から常に心底に埋藏し続け、しかもその後の人生の中で、その二つの感情がともにいよいよ強くなつていったことを語っている。そのような感情の拮抗する苦しさをまず強く意識させたのが宣孝との結婚生活であつたと思われるのである。

紫式部の宣孝への思ひは、生涯を通じて切実なものであつたと想像される。しかし一方、死をも含めてのその存在は、女の生の定めなさと味気なさを痛感させられ、「身」のみならず「心」の不如意さまでも深々と胸中に据えさせられるに至つた、あまりにも重いものであつた。それは凝視すればするほど式部の心に荒涼たる空隙をま

紫式部集における恋歌と哀傷歌

すばかりである。その果てのない空隙からの自己回復の道を式部は「物語」創作の中に求めていったのである。だが前記のごとく、「夕霧」の巻においては、式部はその作品内部の人物形象を超えて顔を覗かせ、紫の上をして作者の代弁者と化してしまつてゐる。虚構の中でのみ解放され、その思念を羽ばたかせることのできた筈の式部の、時として自分が創り上げた作品世界の枠に規制されることへの苛立ちをみるのである。『源氏物語』を座右にしながら、晩年に至つて、さらに家集の編纂を思い立つた式部の意図もそこにあつたのではないだろうか。

満たされなかつた思いの深いほど、その人生への愛執はいつそう強かつたことであらう。残り少ない命を思う時、式部は、自分が辿つた人生のくまぐまの思い、自分をかくあらしめ、今も心の中にくまぐまに刻まれてゐる過去の事件と人物を、その時々々の詠歌によって再び現出させてみたい願望と、自分という女の軌跡を何とか後人に（あるいは特定の個人に）書き遺したいという強い願いに襲われた、と想像してみる。それを思い立たせるに充分な歌作への自信が式部にあつたことは言うまでもない。

しかし、かと言って、自分の人生をそのままに人目に曝すこともまた式部にはできなかった。そうするには、式部の自意識・自尊心も劣等感も、そこから出てくるであらう羞恥心も、ともどもあまり

に強かったのである。「ただ心の筋を、ただよはしからずもしてづめおきて、なだらかならむのみなむ、目安かるべかりける」(源語・玉鬘)とは、式部自身の処生観であらう。そしてこうした人生観が式部自身の詠歌の特徴を形造っていることは、すでに述べ来たところである。

宣孝との交わりの中での一つ一つの詠歌は、式部にとっていかにも捨てがたい珠玉でありながら、そこに記された過去の悩乱の姿は、そのまま記すには忍びない。その人生をへつたなき宿世^④であった、と痛感するがゆえにいつそう募る愛惜と、それゆえに人には知られたくないと思つたためらいの中で、式部は、夫の死の直後の詠歌を切り捨てたり、閨怨の歌を出仕中の歌群の中に紛れ込ませたりするといふ編纂の方法をとつたのではないだろうか。式部集の排列の年代的乱れ(たとえば集後半における羈旅の歌など)を、すべてこうした意識でとらえることは無論できないであろうが、結婚生活における恋歌と、宣孝への哀傷歌の排列については以上のような式部の、自己陰蔽的な意識をみることができると思ふのである。

注

① 結婚の時期については、35～38を結婚前とみるか後とみるかによって、長徳四年冬説と長保元年春説とに分かれているが、「上の薄ら水とけながら」とあるところから、結婚後の歌と考

えた。従つて長徳四年冬としたのである。その終りの時期は、『尊卑分脈』において宣孝の死を、長保三年四月廿五日と記しているのによつたものである。

② 岡一男『源氏物語の基礎的研究』

③ 小稿は紫式部集を自撰集として論をすすめるが、それについての検討は拙稿「紫式部集の成立」(『同志社国文学』9号)で行つたことなので、ここでは省くことにする。

④ 紫式部集の引用は岩波文庫『紫式部集』所収の「校定紫式部集」による。

⑤ 『紫式部』(岩波新書)

⑥ 今井源衛・人物叢書『紫式部』なお、竹内美千代氏・清水好子氏もこれに賛同されている。

⑦ 注⑤に同じ。

⑧ 『源氏物語』の引用は岩波文庫『源氏物語』による。なお、この後(源語)とのみ記す。

⑨ 『源氏物語と紫式部集』・『文学』昭和41・6

⑩ 拙稿、注③と同じ

⑪ 引用は岩波文庫『紫式部日記』による。

⑫ 『源氏物語の創作契機』・『平安朝文学』二巻9号

⑬ 蜻蛉日記上巻

二三日ばかりありて暁方に門を叩く時あり。さなめりと思ふに
憂くてあけさせねば

⑭ 南波浩「紫式部集」・『源氏物語講座』第六卷所収

⑮ たとえば岡一男『紫式部集の基礎的研究』今井源衛『紫式部』

⑯ 注⑬に同じ

⑰ 竹内美千代『紫式部集評釈』

⑱ たとえば、阿部秋生『源氏物語研究序説』岡一男『源氏物語
の基礎的研究』

⑲ 『紫式部日記』

⑳ 『紫式部の意識基体』・『同志社国文学』56合併号

㉑ 式部集の編纂時期は、長和二年冬とされる岡一男氏の御説に
従いたい。（『源氏物語の基礎的研究』）